

林業生産力論への一視角

北 尾 邦 伸

On a point of view to study on productiveness in forestry

Kuninobu KITAO

目 次

I はじめに……………80	(1) 労働過程について
II 林業経済研究の現状における 生産力論……………81	(2) 『生産力』について
(1) 高井征毅「マルクス主義の生産力 概念と『自然破壊・環境』問題」	(3) 重層構造的生産力論
(2) 村尾行一『育林の生産構造』	IV 林業生産力論への若干の言及……………91
III 生産力論なる場所設定……………84	V むすび……………93
	注釈および引用文献……………93
	Résumé ……………95

I はじめに

筆者は昨年、「戦後林業地代論々争に関する一考察」¹⁾なる小論を発表したが、これに対して或る人から、かつてのこれら論争をとり上げて論じる「今日的、実践的意味」を明らかにせよという注文＝批判をいただいた。「現実的学」を志している筆者にとって、この小論がいまだ「実践的意味」を開示していないことを認めざるをえないが故に、それは手厳しい批判であり、反省を迫られるものであった。

ところで筆者は、世の中の存在の仕方に関して或る種の実践的直感を持っているけれども、かつ、その直感でもって調査し、事実を集積し、事象を括っていくことの作業の継続の重要性を認めるものではあるけれども、一方で事実集積の拡がりや前に、「なぜこうなのか」という全体認識につらなる解明すなわち深まり、を可能とする回路を持つことの必要性を痛感している。全体認識は、事実集積の量的拡大とは別次元で形成されるように思える。このことは具体的対象に対処する「方法」を再検討することを迫る。そして、具体経験社会の時間には流されないところの、この「方法」に根拠を与えている場所＝理論的对象、の獲得が要請される。

林業経済研究の歩みを概観してみて、その流れの底に深みを与えている場所が、筆者には林業地代論であるように思われた。かつ、その形成過程での諸論争は「現代的課題」(上記の「今日的意味」よりも今少し振らませて、また、「実践的意味」とは少々距離を置き、すなわち若干「理論的意味」に接近させて筆者は使用している)の中に生きているように思われた。そして、上記の小論を発表した後も、林業地代論それ自体のおもしろさ(「実践的意味で」につなぎうる潜勢力⁴⁾を持つという意味で)を筆者は留保してはいるが、林業地代論が提起された当時の「現代的課題」と今日のそれとのズレをやはり感ぜざるをえない。よってこの際、林業地代論々争の一つの中身であったと思われる林業生産における「自然力」の取扱いをめぐる問題を意識しつつ、林業生産力論なる場所設定を試みてみようとする。

Ⅱ 林業経済研究の現状における生産力論

生産力は、生産関係とはひとまず区別されたところの、これには還元・解消しえないものとしてあることは確かである。しかし、この生産力概念ほどよく語られるほどには把握困難なものはない。林業経済研究界にあって、この生産力論への視角すらいまだ共有されてはいないのではなかろうか。そして、生産力に関する次の二つの型の思考が、林業経済研究にいわば対立的に存在しているように思われる。一つは、高井征毅氏の「マルクス主義の生産力概念と『自然破壊・環境』問題」⁵⁾に見られるものであり、他の一つは、村尾行一氏の『育林の生産構造』⁶⁾に見られるものである。以下、これらについての検討から始めよう。

(1) 高井征毅「マルクス主義の生産力概念と『自然破壊・環境』問題」

一昨年(1999年)の林業経済研究会春季大会は、「開発・自然保護と林業」という統一課題のもとで発表および討論が行なわれた。この討論のまとめをされた石井寛氏によれば、もっとも白熱した議論は「人間による自然の支配可能性の問題、伐採過程に伴う自然破壊の側面の理解にかかわる問題」⁷⁾であったという。確かにこの問題に一人一人が見解を持つことを迫られているのが現代であろう。

大会の発表者の一人である小関隆祺氏は「人間は自然との関係を……根本的に省察しなおすべき時期」⁸⁾に来ており、また、自然を完全に支配しようと思ってもできるものではないとしながらも、氏は基本的に人間の対自然関係を、「人間にとって自然とは生活資材を獲得するための資源であり、同時に居住生活空間としての環境である」と規定して論を進められている。氏にあって、「文化とは自然に対する人間の主体的働きかけであるといつてよく、⁸⁾「自然破壊を必然的にともなう」ものなのである。

この小関氏の報告に対して全林野労働組合名古屋地本の高井征毅氏が、「小関氏は報告のなかで、人間は完全に自然を支配することはできないし、またそれは間違っている、ないしは伐採は自然破壊的な行為を伴うということがいわれているが、現時点としてはこういう風にいうことは可能だと思うが、理念的な問題としては問題である。我々はやはり自然の支配をめざしていると思う。これからの社会の発展のなかで科学技術の発展のなかで自然を支配することをめざすのではないか。」と討論に参加される。では、高井氏の「人間の自然支配」とは何か。氏は一年後の『林業経済』誌に上述の(上)(下)二篇にわたる論文を発表されている。

氏はその(上)の中で、社会的生産力の発展が「社会的進歩の基準」であるとし、「一般に生産力とは、人間の自然に対する支配力の獲得であり、生産力の発展は、文明のあらゆる進歩、あるいは社会的生産力のあらゆる増大、または労働それ自体の生産力のあらゆる増大を意味している。」とされる。このように氏は「一般に」は生産力の発展＝人間の自然支配の獲得＝文化の進歩とされるが、「マルクスやエンゲルスはもっと多く、もっと豊かに」生産力を規定していたとして、生産諸力を列挙される。その一つに「人間をとりまく自然」それ自身も挙げられており、人間の自然支配の内容に「森林に内包されているあらゆる可能性の全面的な開花」をくり込もうとされていることは理解できる。すなわち、「つまり生産力は狭小的に、労働の生産力あるいは労働の生産性として規定されるものではない」ことを示そうとされているのである。しかし、氏の「人間の自然支配」の中身は結局、この文章に直接続く次のセンテンスによって云い現わされているのである。すなわち、「それ(生産力―筆者)は、生産物に対する人間の直接的労働がどれほど減少し、それがどれほど自然力におきかえられているか、不変資本の可変資本に対する比率がどれほど増大しているか、使用価値の量と質がどれほど増大しかつ多様となっているか、社

会的に必要労働時間がどれほど短縮され、自由な時間がどれほど増大しているか、そしてその自由な時間によって人間の個性がどれほど発展しえているかによってはかられるのである。」これが氏の生産力の一般的規定である。そして、このような規定を確保しつつ氏は、その生産力の発展と階級闘争との関係へと論を進められ、「階級闘争は、……生産力のいっそうの発展を必要とする。他方、生産力の発展は、発展すればするほど資本主義的生产様式とは敵対的とならざるをえず、階級闘争はその領域を拡大する一方一層激化し、階級闘争そのものの⁹⁾廃絶、自己の止揚への闘争へと発展する。」と結んで行かれる。

氏はその(下)で、国有林経営の「合理化」過程と関連させつつ、「剰余価値の生産のためには、たえまなく生産力を発展させなければならない」ところの資本主義的生产様式下において林業においても、「それ以前とは比べものにならない大規模な森林の伐採とそれを可能にしたチェーン・ソーの出現、巨大な林道延長、千メートルもの集材能力をもつ大型集材機、トラック輸送等々、生産力がこれほどまでに発展」したのであるが、この生産力はいまや「自然破壊段階」に到達しており、「自然破壊は、生産力がその破壊力に転化される過程」であると云われる。そして、「自然破壊の内実は、人間的自然の破壊がその主要な側面」であるとされるところから氏は、国有林労働力破壊についての実態を中心にして論述される。資本による生産力の追求は、労働者にとってはむしろ「絶対的な労働強化ならびに請負の拡大」としてあらわれ、「労働者の肉体的身体を破壊する労働災害や職業病となってあらわ」れていること、また、「国有林労働者の大部分の生活は貧しく、生活は『かつかつ』」に留めおかれていることに注目されている。そして氏は、この労働力の破壊、荒廃は生産力発展の桎梏となっており、それは「生産関係の止揚によってのみ解決されるのである。」と述べられる。

以上のように高井氏は、生産力なる自然-人間関係問題を人間的自然の再生産に焦点を絞りつつ資本対賃労働すなわち資本主義的生产関係の問題に移されている。確かに問題を生産関係の場に引き入れたならば、生産力の増大にもかかわらずそれが労働者にとっては自由可処分時間にはならず、剰余価値を産出するための実働時間に転化されている現実があり、それを階級的立場から撃つことは正当であろう。生産力増大は可能態としては自由可処分時間の増大であっても、労働者にとっての現実態としてはあくまでも過剰労働時間としてあるのである。¹⁰⁾また筆者も、高井氏と同様に生産力発展の「新しい到達段階」は、「生産関係の止揚によってのみ解決される」と考えている。

しかし筆者は、氏が結論されるように「先進民主主義の実現」によって「生産力をさらにダイナミックに発展」させ、「人間の(自然)支配の完全なる発展」へと進めねばならないといった形での、多分に単線発展的な生産力の量的拡大を基礎とした歴史構成には賛同しにくい。氏も事実指摘として正しく述べられているような現行の生産力の飛躍的な増進は、その裏に一体となった形で自然破壊(限りなき分業化も含む)を伴って実現されているのであり、現行以上の「さらにダイナミック」な『生産力』の発展を現時点で想定、期待することの意義が筆者には理解しえない。むしろ、生産力展開の質的相違を歴史において見る必要があるのではなからうか。

ともかく高井氏は、『生産力』の発展および「人間の自然支配」は社会の進歩の基準として継承しなければならぬもの、そして次の社会においてその更なるダイナミックな発展が保証されているものと考えられているのであり、かつ、『生産力』を生産関係の場に引きよせて問題を論じておられると云えるのである。

(2) 村尾行一『育林の生産構造』

高井氏が、『生産力』の量的拡大に、そして、来るべき社会でのその満面開花に歴史の進歩を見ようとされているのに対し、村尾行一氏は『生産力』概念そのものを放棄されているようであ

る。では、氏の生産力理解とはどのようなものであろうか。

村尾氏の生産力論の第一の特徴は、生産力を概念的に把握することの敬遠ないしは拒否であり、生産力を理論的对象とする場所を塞ぎつつ個別具体的な対象を直接持込むべきだとされる点である。氏は、生産力は「すぐれて量的な概念であるからには、その把握は量的指標化を必須とする」(p. 163)と述べ、具体的なその操作的、定量的把握方法をめぐる次元でそれを問題にすべきだ(p. 164)と主張される。そして、定量的把握方法を見出してもらえない生産力概念は概念たりえず、「自殺する以外に途は残されていない」(p. 165)と述べられる¹¹⁾。よって氏にあっては、「育林生産力の概念化＝把握方法の発見」(p. 173)なのである。氏の、生産力を個別具体の領域にのみ留めおこうとされる思考は、次の二点によく表現されている。④生産力とは譬えとしては体力測定のようなものであり、生産力把握もこれと同様で、「種々の方法による測定諸結果を総合することにより」(p. 168)なされる。⑤「生産力は、具体的な目的設定された労働によるところの使用価値的概念であるから、したがって、生産力の比較は同一使用価値生産の場合を原則とし且つ、これを第一義的な目的とする」(p. 174)ことを強調される。

なお、行論のうちに氏の理論、抽象レベルでの生産力の概念把握を窺い知ることができる。そしてそれは、イコール技術概念であり、「育林生産力水準とは換言すれば、育林技術水準である」(p. 173)のである。一方、氏は、この技術概念については全面的に武谷三男氏の技術規定(いわゆる「適用説」)に依っておられる。よって氏の生産力概念には、理論的对象次元での定量概念が欠如しており、したがって具体的対象の次元ではじめて何らかの量的なものを入れなければならないことになり、概念そのものが抽象力を発揮できないものとしてある。

氏が具体的に発見された育林生産力の把握方法は、「胸高断面積合計値の計測」(p. 179)であるが、これには人間労働力の投下量は一切考慮の外にあり、この点が氏の生産力論の第二の特徴をなす。(『生産力』放棄的思考とは、ひとまずこの意味において理解していただきたい。)村尾氏は、「労働生産性説の呪縛をたちきり、土地生産性によって生産力を把握することを積極的に肯定」(p. 169)されており、氏の生産力はどちらかと云えば、人間が働きかけていく対象的自然の豊かさを示そうとする「土地生産力」説の範疇に入るであろう。しかし、それにしては同一土地についての時系列的な形でその水準の発展が計測されているわけでもなく、また、胸高断面積合計値は「土地生産力」を表示するにはあまりに狭く、部分的すぎる。

氏は、「森林として、直接且つ具体的には自然と混然一体となっている人間の諸力を『分溜』し且つ、その水準を定量的に確定」(p. 173)するために、あえてその部分的なものの計測を前面におし出されたのであり、「土地産業における生産力の発展とは、自然的生産力水準とは別個の、しかし、自然をより高度に開発する能力としての人間の諸力の発展」(p. 171～172)として測定把握しようとしたのである。それは、具体的対象次元で考えた場合、確かに興味ある試みであった。しかし、対象的自然のもっている潜勢的な自然的生産力そのものを確定できない以上、すなわち、生産力とは常に自然と人間労働の合体したものとして発現する以上、その「分溜」の試みは至難のわざであろう。現に、村尾氏の方法である胸高断面積合計値の計測結果の林地別相違が、果してその土地が持っている自然力の属性から解放された数値として示されているものかどうか疑問と云わねばならない。

ところで一方、村尾氏は、林業生産は自然的生産力の再生産契機とその自然的生産力を獲得する様式との二つの契機からなる(p. 2)という大層示唆的で興味深いシェーマを提出される。しかし、氏の設定では、林業生産は「自然的生産力が再生産されることを不可欠の前提」(p. 1)としており、自然の循環の攪乱と恢復は予定調和的にくり返される。よってそのシェーマは、やがては自然的生産力の再生産が人工的再生産となる培養段階に到るという達観的發展論として終わっている。氏の論にあっては、もともと『生産力』の視角が欠けており林業生産の発展シェーマは

歴史の旋回基軸を欠如したものとしてある。また、生産関係との関連づけが困難な生産力論となっている。

以上、林業経済研究において生産力論ははまだ満足しうるものではない。林業発展に対する歴史認識も、生産力把握を研ぐことなくしてその発展はありえないであろう。

III 生産力論なる場所設定

生産力なる概念ほど設定困難な概念はないであろう。それは、列挙する論じ方、すなわち諸要素の形および個別具体的な形での論への傾向力を持つ。また、進歩とか発展とかいった魅惑的な意味に引きつけて論じられやすい。このことは何よりも、累積的ではあるが直線的な発展の中で把握したくさせる力を生産力概念が持っていることを意味する。

このような歴史的連続性そのものを示しているように見える生産力概念に対して、如何に認識論的切断——一般理論が内包していなければならない質的区分＝歴史の真の発展水準の確定——をなしうるかという問題設定をしたのはバリバールであった。この問いのもとで彼は、生産力をも「一つの関係」¹²⁾として歴史理論の基礎概念である生産様式に個有なもの、内在するものとして分析することを試みている。彼は、「資本主義ははじめて、そして永遠に生産力を解放したということではなく、資本主義は生産諸力に一定の型の発展——そのリズムと進行は資本蓄積過程の形態によって規定された、資本主義に固有なものである——を押しつけた」¹²⁾のだと見る。彼バリバールは、何が発展するのかという「発展主体」を生産様式に置き、その発展諸形態の継起と、継起が引き起こす「移行」(新たな結合へ)の問題として歴史をあくまで結合(構造)の水準で認識しようとしており、この構造は経験的記述からの抽象とは無縁であることを主張している。この点、歴史的現実批判の方法としては疑問が残るけれども、歴史認識の方法として教えられるところが大きい。しかし、彼が『資本論』の「労働とは、なによりもまず人間と自然の間で行なわれる行為であり、人間はそこで自然と向かい合って自然力のような役割を果たす」を引用して、「自然」を社会的な一つの要素にしつつ欠如させていく¹⁵⁾ことは、再考を要するように思われる。

我々は、生産力を生産関係と関連させることを意識しつつも、今少し人間—自然関係そのものとして、それ自身の中に内的矛盾(＝論理原理)を設定した生産力論を構築することを試みたく思う。以下、生産力概念の創始者であるマルクスに即して検討して行くことにする。¹⁶⁾

(1) 労働過程について

マルクスは『資本論』において、資本制の生産様式に組み込まれた労働を労働の二重性として、すなわち労働過程と価値増殖過程の二面をもった統一構造として描いている。この資本制社会は、人間がいわば自然的存在のうちに埋没していた前資本制社会とは違って、労働する主体の客体的労働条件からの徹底した分離過程として現われる。そして、「人間が自然をひとつの機械の世界に転化させることによって、自然を全面的に、技術的・経済的ならびに科学的に支配することに成功すると、自然は一個の抽象的な、人間に対して外的な即自にまで凝固してしまう。」¹⁷⁾一方で、労働主体たる人間も「たんに労働する個人として……抽象として現われる」¹⁸⁾ことになり、人間が超自然的な創造力を持っており自然力は人間労働によって置きかえうるといった観念論をも生み出して行く。この資本制社会の人間—自然関係は、前社会のそれの全く逆立ちしたものとしてあるのであり、「ブルジョア的見解は、かのローマン的見解にたいする対立以上に出たことはないのであって、それゆえ正当な対立としてのローマン的見解は、天国のはてるまでもブルジョア的見解といっしょにいくだろう。」と云われる所以である。自然の単なる素材化・客体化の進行は、単なる自然の讃美と常に背合わせになって共にあるのである。

マルクスは、「労働はすべての富およびすべての文化の源泉である」と規定したドイツ労働党綱領草案を批判して云う。「労働はすべての富の源泉ではない。自然は労働と同じ程度に使用価値の源泉であり（そして物的富は実にこの使用価値²⁰⁾から成り立っているのだ!）、労働自体は人間の労働力という一つの自然力の発現にすぎない。」と。そして、「人間がすべての労働手段および労働対象の第一の源泉たる自然に最初から所有者として関係し、それを彼に属するものとして取扱う²⁰⁾」ところの、そして労働の客体的条件、対象的自然については語らずに「労働に超自然的創造力をなすりつける²⁰⁾」ところの「ブルジョア的語法²⁰⁾」を批判している。この批判の基底には、若きマルクスが獲得した人間主義＝自然主義の立場、そして後年に物質代謝概念として結実した人間－自然関係の認識が踏えられているのである。

マルクスは、『経済学・哲学草稿』において次のように書いている。「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間の本質の現実的な獲得としての共産主義。……この共産主義は完成した自然主義として＝人間主義であり、完成した人間主義として＝自然主義である。それは人間と自然とのあいだの、……自由と必然との、個と類とのあいだの争いの真の解決である。」²¹⁾すなわち、自然の真の復活と人間の完全なる自己復帰としての人間主義＝自然主義の立場を宣言している。この思想は『資本論』においても、物質代謝概念を獲得した「労働過程」論として発展的にくみ込まれている。有名な一節は次のように述べている。「労働はさしあたり、人間と自然との間の一過程、すなわち、それにおいて人間が人間の自然との質料変換を彼自身の行為によって媒介し・規制し・統制する一過程である。」²²⁾と。

このように労働過程は人間と自然との質料転換の一過程であり、主体的で合目的々活動である労働も、その質料の形態を変えているにすぎないのであり、「つねに、人間の協力なしに天然に現在する一の物質的基体²⁴⁾」がこの過程を貫徹し、「残存²⁵⁾」しているのである。かくして使用価値は、自然質料と形態を与える人間労働との結合なのであり、だから労働は「人間の、どんな社会形態とも係わりのない生存条件であり、人間と自然との間の質料変換つまり人間の生活を媒介するための永久的な自然的必然である²⁶⁾」のである。そして、人間の労働力それ自身が「一つの自然力」であり、「彼の外部の自然に働きかけてこれを変化させることにより、同時に彼自身の自然を変化させる²⁷⁾」のである。

このようにマルクスは労働過程を「まず何よりも自然過程、換言すれば自然自体の自己媒介の過程²⁸⁾」として、「自然史的」パースペクティブにおいてとらえている。この質料主義の立場からすれば、質料の形態変化をなすにすぎない人間が、自然を支配するということはありません、「人間の自然支配²⁹⁾」は問題になりえない。自然は人間の活動に不可欠な契機として「すべての労働手段と労働対象の第一の源泉」でありつづけるのである。

（２）『生産力』について

前に見たように、対象としての自然に人間は一つの自然力として対するのであるが、この対象の形態変化＝形成的労働をなすに当って人間は、目的意識的にこれを行なう。そして自然を人間の効用の見地からとり込み、自然を「人間の非有機的身体³⁰⁾」としていく。この意味で人間は全自然を獲得し、とり込もうとするのであり、ここに第２の意味の「人間の自然支配」の問題が浮び上がる。そして、この労働の仕方（剰余労働をも生産する生産の方式）によって、人間は歴史を持つことになる。また一方自然は、「産業」に媒介されて歴史的な自然となる。

資本制社会に到って、この「人間の自然支配」は飛躍的な発展をする。この資本制社会は人間の不具化を生み出すが、と同時に人間の究極的解放の手段をも生み出しているとマルクスは二重に分析する。「……普遍的に発展した諸個人は、自然の産物ではなくて、歴史の産物である。こ

うした個性が可能になる力能の発展の程度と普遍性とは、まさに交換価値を基礎とする生産を前提としており、この生産は、一般性とともに、個人の自己および他人からの疎外を、だがまたその対外関係と能力との一般性と全面性をもはじめて生産する。³²⁾と。このように資本制社会は、真の富である「社会的個体の発展」³³⁾を客観的に準備しているとして、マルクスはこれらのことを「資本の偉大な文明化作用」³⁴⁾と呼んだのである。

そして、この客観的な歴史切開の積極性の把握として『生産力』概念がある。これは、「より少量の労働がより多量の使用価値を生産する力を獲得するような、労働過程における変化のこと」³⁵⁾であり、社会的必要労働時間の短縮なる量的なものを含んだ概念として把握されている。

マルクスは、この『生産力』の量的発展の延長上に、その基礎の上に自然史の一段階である人類史の始まりを設定する。少々長くなるが引用しておくとな次のようなものである。「人間の発展につれて、欲望が拡大するがゆえに、この自然的必然の領域が拡大する。だが同時に、この欲望を充たす生産諸力も拡大する。この領域内での自由は、ただ、社会化された人間・結合した生産者たちが、自然との彼等の質料変換により盲目的力によつての如く支配される代りに、この質料変換を合理的に規制し、彼等の共同的統制のもとに置くという点——最小の力を充用して、彼等の人間性に最もふさわしく最も適当な諸条件のもとで、この質料変換を行うという点——にのみありうる。だが、これは依然として常に必然の領域である。必然の領域の彼岸において、自己目的として行われる人間の力の発展が、真の自由の領域が——といっても、かの必然の領域を基礎としてのみ開花しうる自由の領域が、——はじまる。労働日の短縮は根本条件である。」³⁶⁾ここにおいてマルクスは、「労働からの解放」の領域で人類史の人類史たる所以＝「自由（時間）」を説いている。この自由時間は労働＝必要労働時間と抽象的に対立しているのでもなく、また、それとの関連を断ち切って一方的に脹らんでいけるものではない。「真実の経済＝節約＝労働時間の節約にある。だがこの節約は生産力の発展と同じである。……労働時間の節約は自由時間の、つまり個人の完全な発展のための時間の増大にひとしく、またこの時間はそれ自身ふたたび最大の生産力として、労働の生産力に反作用をおよぼす。それは直接的生産過程の立場からは固定資本の生産とみなすことができる、³⁷⁾というのはこの固定資本は人間自身だからである。」以上は、次のように図式化しうるであろう。

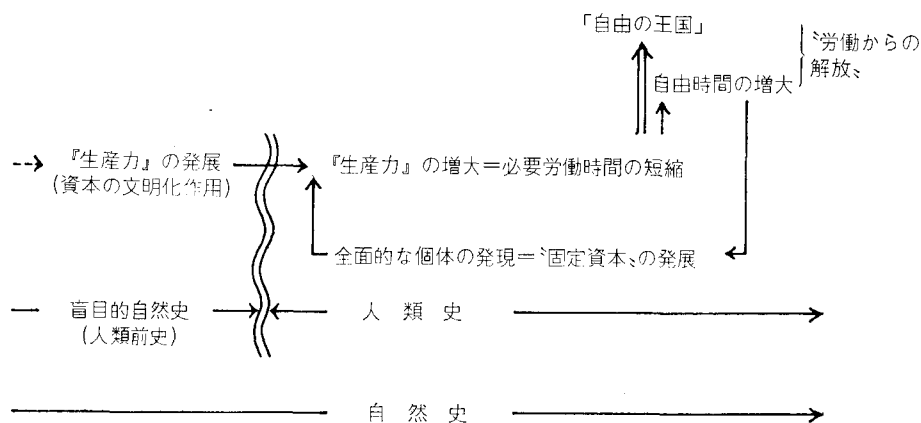


図 1

(3) 重層的構造的生産力論

労働過程は『生産力』を関連させて説かれることによって、その中身である人間－自然関係は

単なる相互作用説に陥らないものとして把握されうる。そして、人間の自然に対する現実的領有関係として、人間－自然関係は進歩的、発展的なものとなり歴史を構成することを可能とする。しかし、問題はこの労働過程と『生産力』の関連のさせ方である。筆者には、『要綱』→『資本論』段階のマルクスは種々の伏線を張りめぐらせつつも、生産力論を『生産力』に通約する傾向にあったように思われる。そしてそのことによって、資本制的生産関係（含交通様式）の解明に焦点を絞っていったのである。

ところで、確かに『生産力』と生産関係の矛盾は、資本主義的生産様式それ自体の発展の旋回基軸である。しかし、資本制的生産関係および生産様式の止揚の主体形成をこの矛盾構造の中に、ないしは『生産力』の発展そのものに見い出そうとすることは誤りであろう。悪無限的に剰余労働の領有を追求する資本は、固定資本の増強でもって自然に迫り、相対的剰余価値生産を行なうのであるが、ここに労働時間の短縮＝自由可処分時間の増大が可能態として生み出される。しかし、固定資本が新たな価値を生み出すわけではなく、この増強は剰余労働領有の対象そのものの縮小であり、一つの自己矛盾としてある。かくして資本は生産量および不生産労働領域を拡大させつつ自由可処分時間を剰余労働時間に転化せしめて自らの時間とする諸条件を生産する形で発展するのであり、資本制的生産様式の永遠化（労働価値法則の貫徹）へ向おうとするのである。一方この自由可処分時間の享受・獲得をめぐる、生産関係としての資本の内部矛盾（資本対賃労働）が現出し、この生産関係に対して否定的な主体形成がなされる階級闘争の局面が存在することになる。

以上のように、生産様式論、生産関係論の場所設定は比較的はっきりしている。しかし、生産力論はどうなのか。

生産力論は、生産力を『生産力』に解消しないことによって成立するのではなかろうか。ここでの内部矛盾は、『生産力』と「自然の再生産」そのものによって構成されるのであり、「自然の再生産」を資本（人間）にとつての「時間」に還元することを否定する契機（場所的契機）を自然自身が持っていることの発見を介して形成されるように思われる。それは、自然に対する資本の普遍化・文明化作用に対する拒否を含んだものであり、資本にとっての制約を自然の側から考察していく必要性を伴うものである。このような観点から、現代的課題を抱えた我々の問題意識に引きつけつつ、マルクスの生産力論を批判的に検討しておこう。

第一点は、人間の自由の問題と係わるものであり、『生産力』を肯定的な形で生産関係の中にもち込み、その上で自由の問題を論じる方法に対して、生産力論内部で人間の自由の問題を扱うことの試みに通じるものである。

マルクスは先に引用した自由の王国の設定の仕方でも分るように、人間の自由を労働過程の外で、すなわち自然必然性の外で開花させている。よって、マルクーゼが次のようにマルクス（主義）を読むことは不当ではない。「自然と自由との関係は、社会理論においてまずほとんど明確にされていない。マルクス主義においても自然はもっぱら対象であり、人間の『自然との闘争』における相手であって、生産力のより合理的な発展の場面とされている。⁴⁰⁾」そして、彼の次の問いは意味を有しているように思われる。「自然はたんに生産力にすぎないのであるか、それとも自然はまた『それ自身のために』も存在し、そのような仕方 で存在することによってまた人間のために存在するのではないか？」⁴⁰⁾

マルクスの自然概念を精緻に検討して好著をものにした A. シュミットは、マルクスとエンゲルスは、前者は後者に比して自由の王国への移行プロセスが「はるかに懐疑的で、また弁証法的でもある」⁴¹⁾にしても、自由な社会での対自然像は一致しているとして、エンゲルスの『自然の弁証法』を援用しつつ次のような理解を示す。「将来においても自然の搾取は中止すべきではなく、自然への人間的干渉は、そのより遠い効果をも制御可能の範囲内にとどめておくように合理化さ

れるべきである。それによって自然は一步一步、人間に対するその勝利のためになおやはり人間に復讐しようとする可能性を奪いとられるべきである」と。⁴²⁾

このエンゲルスは『反デューリング論』において、社会が生産手段を掌握するとともに、「いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する。人間は、自分自身の社会的結合の主人となるからこそ、またそうなることによって、いまや始めて自然の意識的な、ほんとうの主人となる。……これまで歴史を支配してきた客観的な、外的な諸力は、人間自身の統制に服する。このときからはじめて、人間は、十分に意識して自分の歴史を自分でつくるようになる。」と述べている。このような「自分の歴史を自分でつくる」と想定される社会では、自然は歴史の契機ではなくなるし、自然は科学の捉え直しを迫る契機をすら剝奪されていることになる。マルクスは確かに今少し慎重であり、前述したように自由の王国と必然の王国とを後者の基礎のうえで相互に和解せしめており、自然はやはり歴史の契機としてあり続けている。しかし、自然が人間的自由の契機であるわけではない。⁴¹⁾

それに対してマルクーゼは、「自然の解放」なる概念を提出する。彼は、自然がそこにあるのは支配されるためであり、それは単なる素材だといった視角ではなく、「自然のうちに生命を高揚する諸力を再発見すること、感覚的な美的性質を再発見すること」の意味を引き出そうとしているのであり、この「自然の解放」の中に、終ることのない競争に浪費されている生活には無縁な、自由の新しい諸特質を見ようとする。「……『自然の解放』は、搾取のための科学・技術の破壊的濫用から人間と自然を自由にするために技術文明の成果を利用する方向への前進を意味する。そのときには、失われた職人仕事の美質のあるものはきっとまたふたたび新しい技術的基盤の上に立ちあらわれてくることであろう。」と彼は述べている。彼は、労働を、すなわち自然との係り方を『生産力』視角でのみ見るのではなく、労働＝活動として、生活そのものとして、そして時には自然のリズムとして見る見方を保持しうる社会像を描いており、自然とそのような関係に入ることに自由に求めようとしているのである。かつ、そのような評価の視点を確保しつつ、現代を、そして現代を前から引っぱりようとする理論そのものを批判的に照射しようとしている。

筆者も、人間はそして科学であれ自由であれ、どこまでも感性を保持しているべきものであり、そのことによって内面的であり個体的でありうるのだと考えている。そしてそれは、生きた対象的自然との連関構造を有していることによって現実的なものとなりうるであろう。自然は常に否定的契機でありつづけるのである。これらのことは、結局、人間の主体性の問題へと繋がっていくものであるが、ここは、人間も自然も被圧されるほどの圧倒的な労働手段の体制下であっても、人間の存在意味はやはり何よりも対象と労働主体との係りの中にあることを見据えていた武谷技術論の生きる場所でもある。技術を科学的法則の単なる応用として規定するのではなく、氏の規定にあって技術は、科学を「客観的法則性」として捉えて対象に意識的に適用していく過程であり、であるがゆえに対象認識(科学)の反省過程でもあるわけで、「活動的」であるとともに「受苦的」な実践構造をもつものとしてあるのである。よって武谷技術論は、『生産力』論とは異次元なものとしてある。「生産力と技術、或は技能は全然別個の概念である。……技術、技能は目的により法則として規定される、生産的実践の様式、仕方のみに関するものであって、エネルギー的なものは何らそれに含まれていない。」⁴⁷⁾のである。かくして、武谷技術論は受苦する契機を有しているがゆえに、原爆問題⁴⁸⁾の日常化である公害問題——たとえば病める海を前にして——実践的に取り組めるのであり、その技術規定はいまだ有効性を保持しているのである。

他の一点は、『生産力』と「自然の再生産」の関連構造そのものである。前に、マルクスは生産力論を『生産力』に通約していく傾向にあったと述べたが、ではその際の労働過程論の中身は如何なるものであろうか。

歴史を彷彿とさせるすばらしい幾多の論稿をものにされている内田義彦氏の理解にあっても、それは次のようなものとしてある。「マルクスは労働手段と労働対象を、労働の客観的条件として、生産手段という概念に統一しております。過去の労働の所産である生産手段が、現在の、生きた、働きつつある労働主体をどれだけ補佐しているか、その程度に応じて生産力は高いわけです。そのうち労働手段の方は、労働手段があるから生産力が高いということになりますし、労働対象の方は、生産力が高いから労働対象の消費が多いわけで、原因と結果とのちがいはあります。しかし生産力の高さの表示という点でみると、生産手段が、生きた労働を補佐する程度で示される⁴⁹⁾」と。すなわち、労働手段が高度であるが故に生産力が高いのであり、労働の蓄積はもっぱら労働手段に対してなされ、それによって強力で自然を「消費」することが可能となる。そのようなものとして労働主体（および労働手段）と对象的自然の関係が把握されているのである。

マルクス自身も労働過程をやはりあくまで「使用価値視点」から捉えている。「(労働)過程は生産物においては消失する。過程の生産物は一の使用価値であり、形態変化によって人間の欲望に適合させられた一⁵⁰⁾の自然質料である。労働はその対象と結合した。労働は対象化されており、対象は加工されている。」⁵¹⁾すなわち、労働は使用価値を生産したことにおいて終るのであり、労働過程＝自然の領有過程なのである。そして、このことを前提にして A. シュミットが次のように敷衍して述べの時、問題が表面に現出する。「使用価値はそれが否定されることによって、その本来の規定に到達する。消費において使用価値は自己を確証する。」⁵³⁾「人間が自然の素材を通過してゆくように、自然は使用価値として、人間を通過し、ふたたび転化してたんなる自然に帰るのである。」⁵³⁾と述べる時に。問題は、对象的自然の循環性、再生産性を人間が分断し、目的意識的に自然を個別的なものとしてとり出す形で使用価値生産（労働過程）を想定する一方で、人間による使用価値の消費を通して、非労働過程的に「自然に帰る」還元解消機構を全体的自然が持っているように想定していることである。この点、人間も一つの自然力として自然に連関しているのだからそれら（生産－消費）すべてが「全自然を再生産する」⁵⁴⁾過程なのだ、と云って済めるわけにはいかない。

繰り返し述べてきたように、『生産力』は直接的には一つの自然力である人間についての、その再生産に係わる概念であり、その水準はこの再生産のために必要な必要労働時間と、それから解放された自由時間との量的関係で示される。しかし、『生産力』はより基底的には、人間と外なる自然との物質代謝過程があり、この一種の「交換のカテゴリー」⁵⁵⁾で捉えたものをくぐらせた結果発現するもののはずである。そしてマルクスは「交換」価値に関する一つの叙述として次のような興味ある書き方をしている。「交換価値はまず第一に、必要な諸使用価値について交換目的にむけられた余剰である。この余剰は、そのものとしての余剰である。この余剰は、そのものとしての過剰物と、すなわち直接的な必要の範囲をこえるものと交換され、日常の必要とは異なる他所行きのものと交換される。……つまりそれ自体初めからやはり、他所行きの使用の、直接的必要をこえる使用の諸価値なのである。」⁵⁶⁾と。ここでマルクスは、使用価値生産を行なった経済主体相互間の交換を描いている。ところでこの文の「直接的な必要」を一つの自然力としての人間にとってのそれではなく、「外なる自然」の再生産に必要なものと読み変えるとどうなるであろうか。そして、「他所行き」可能な「余剰」を人間と交換する形で生産力が形成されるのだと考えるのはどうであろうか。

このように読むことは、外なる自然をも一つの“主体”と見なすことに繋がっていく。労働価値法則にあっても、新しく価値を創造できるという意味で生産の主体はあくまで人間であり、ここでの人間－自然関係はあくまで主体－客体関係である。しかし、かつてはこのような関係が支配的ではなかったし、また、将来もこの関係が貫徹するか否かは疑問と云わねばならない。価値を労働価値説のそれよりも広い意味にとり、古い価値を保持しつつ新しい価値を造り出す自然を

も一つの“主体”と認めた形での、人間—自然の交換関係が未来に向う関係として再び問題となるのではなからうか。

結局は人間の効用の体系の中に自然をひき込んで行っているのだと云えなくはないにしても、労働は単に人間の側での使用価値生産に終るのではなく、「余剰」を自然に返す形で自然の豊かさの中においても終るそのような視角（「人間⇄自然」）が必要なのである。そしてこれは、歴史的に見て『生産力』視角と整合しているわけではない。生産力はあくまで「人間⇄自然」と『生産力』の矛盾構造として展開してくるのである。

以上、生産力論は、「人間⇄自然」と『生産力』の矛盾構造として設定しなければならないが、生産力を形成する労働の過程も、『生産力』追求にひっぱられた労働内容をもつ労働過程 α と、「人間⇄自然」にすぐれて規定された形で形成される生産力の労働内容である労働過程 ω に両極化しうる二面性をもつものとして重層構造的把握を必要とする。労働過程 α は、結果的、客観主義的論法からは、より外部の自然を引き入れていく一過程として、労働過程 ω の深化発展の先鋒的役割を果たしているように云えるかもしれない。しかし、自然の側から見れば、あくまで分断的に切りとっていかれるところの、自然の再生産が保証されていない過程である。これは、労働過程を資本がとり込み、資本の再生産が深化拡大する一方で、自然の限りない荒廃が生じている現実と無関係ではない。「人間⇄自然」をある程度は踏えざるをえない農業を、資本は食料・原料問題として包摂せざるをえないにしても、常に自分とは異質なものとして、それを鉅一工業によって代替することを目ざしており、かつ、それを成功さしえた際にも、全自然の再生産（産業廃棄物および消費廃棄物をもくみ込んでの再生産）を放棄した形で生産を行なっているのである。このような現実のもとで『生産力』は飛躍的に増大しているのである。そして、これをどこまで継承拡大させるかは疑問であり、自然の再生産の確固たる基礎の上で『生産力』は相対化される必要があるのである。前述した、労働の中に自由を見ていく視点を考え合わせるならば、二重の相対化を『生産力』は迫られていると云えるであろう。

このように、むしろ普遍的なものと考えられてきたように見える歴史についての『生産力』発展視角、への「人間⇄自然」関係（労働過程 ω ）のもち込みは、歴史を単線発展的な段階論に解消しえない、構造的把握の必要根拠を示してはいないであろうか。歴史認識はかくして、段階的なものと場所的・構造的なものとの交錯するものとして構成される必要があるように思われる。方法論の中に、過程的なものに対するネガティブなものを構造化しておくことが必要で、そのことによって初めて歴史（一つの生産様式）の他の歴史への「移行」論が扱いうるのではなからうか。以上は、次のように図式化しうるであろう。

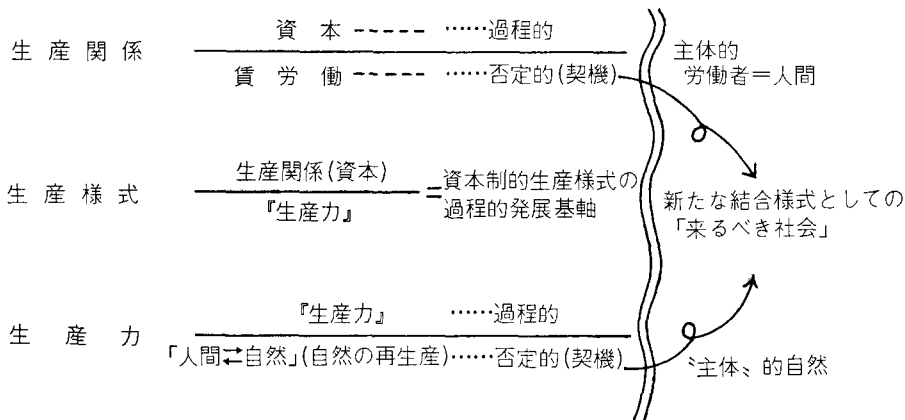


図 2

IV 林業生産力論への若干の言及

林業生産の発展を歴史認識しようとする際、林業生産力論を欠くことはできないであろう。この林業生産力論は従来「遅れ一進歩」論として、そして他産業に比しての「遅れ」に注目して、問題がたてられることが多かったように思われる。そして、農民層分解を不徹底にしかやりえない資本主義の発展段階において、この「遅れ」を資本主義自身が固定化させる傾向を有することが問題にされたし、また一方、総資本が資源・原料問題的に係わって木材生産総量の発展的確保に乗り出す時に生起する問題が考察された。が、それとともに林業生産力論には、特殊林業的なやっかいな問題が潜伏し続けていた。それは、二範疇林業論と云われてきたものであり、生産力形成の二形態が一産業としての林業に内包されていることに係るものである。半田良一氏は、「二範疇林業の発想と林業生産力の本質の究明とは、おのずから論議の次元を異にする⁵⁷⁾」と述べておられるが、二範疇林業論はまさに、林業生産力論の場で扱われるべきものではなかったか。

林業と云った場合、それを伐出生産から始めるものとして把握するか、育林生産から始めるものとして把握するかがまず問題となる。このことは、林業をほとんど育成林業（さらにはそのうちの育林業⁵⁸⁾）にのみ限定して考察してきた官庁学的古典林学においては、問題になりえないことであった。そして、林業認識の「源基的形態⁵⁹⁾」を採取林業に据えたことにこそ、戦後林業経済研究の出発点があり、礎があったのである。

ところで、一般に林業の歴史的発展は、採取林業から育成林業へと発展するものと考えられている。このような林業発展段階の大枠の設定自体は認めねばならず、正しいことであろう。前者は労働過程としては伐出過程のみであり、後者は育林過程と伐出過程から成りたっている。そしてここで、通常考えられている中身でもって林業の二範疇を採取林業と育成林業と考えたならば、鈴木尚夫氏がかつて見抜かれたように、これら二つは「一つはその本源の形態であり、他はその発展形態⁶⁰⁾」であって、「決して異なる二範疇をなすものではないという技術的認識を基礎⁶¹⁾」とし、「まず二つの異なった生産形態の技術的連続性を明らかに⁶¹⁾」することが、地代論分析に先だって重要問題となるのである。しかし筆者は、林業生産を、前述した生産力視角でもっての林業生産力論の形で正面から捉えなおす必要を感じる。以下、あまり余力がないが、二範疇林業論と係わらせる面において林業生産力論への若干の言及を行なっておくことにする。

伐出から始める採取林業は、森林の「蓄積」の存在を前提として出発するし、一方、一般に想定されている育成林業は、裸地を前提としてそこから出発する。しかし、この森林「蓄積」に対する係わり方によって、採取林業から育成林業への「技術的連続性」の形態が異なってくる。と云うよりもむしろ、採取林業そのもののものに生産力形成の二形態（二範疇）を見なければならぬのではなからうか。二範疇林業論は、時間に解消しえない場所的なものを含ませつつ、採取林業の中へ、そして同時同地点の併存問題として持ち込んでこそその意味を発揮することになるはずであった。筆者はかつて、このような視点から二範疇林業論の再構成を試みておいた。⁶²⁾

採取林業 α は、対象とする林木を単なる自然的素材と見なし、そのもとで『生産力』を最も上げうるような形で伐出生産を行なう。「人間 $\rightleftharpoons$ 自然」関係はより外の自然を「発見」する形で将来の問題へと引き延ばされ、林木蓄積＝素材としての自然を領有した後は、活動地点を移動させて次々と奥地化して行く。しかしその過程で生産した剰余労働を労働手段の形で蓄積し、それを増強することによって『生産力』を落さないような努力をなす。その延長上で、時にはより豊富な自然を見出し、飛躍的な『生産力』のもとでそれを自らのものとすることもありうる。この採取林業 α の具体的歴史の展開はダイナミックであり、『生産力』追求の技術（労働対象と労働手段の結合様式）発展と関連させつつ詳しく省察する必要があるであろう。⁶³⁾

一方、採取林業 ω は、ある一定の面積の「土地」に留まって、そこにおける永続的再生産を意図するものであり、対象的自然自らの再生産力をくみ込んでの生産方法である。そして、この土地に留まっていた生産の連続性のために、この土地内に一定の森林「蓄積」を常に留保しておくことが必要となる。この森林「蓄積」は、伐出なる労働過程の立場からは採取林業 α のそれと同じく労働対象であるけれども、他面それ自体としての存続を認められたものとしてあり、素材としての単なる労働対象には留まらない。それは、「蓄積」=成長としてもあり、自己の潜勢力を保持した有機的なものとしてある。よって森林「蓄積」の保持、形成をめざす収獲規制技術の技術的連続性の上にやがてはこの自然の潜勢力の保育、涵養をより積極的になす形で育成林業が展開することになるのである。しかし、採取林業段階にあっては、いまだそれは収獲規制技術、天然更新技術に留まって伐出生産（伐出生産の過程の中に伐採＝更新の形で自然の再生産力が考慮に入れられる）が行なわれて採取林業 ω の生産力が形成されることになる。強力に歴史を捉えたあのドイツ法正林施業（祖型的にはカメラルタキセ法）は、このような生産力の基礎を持っていたと云えるのではなかろうか。

ところで生産力は、社会的な生産関係を介して現実化される。今さしあたり、重層構造的生産力論を、資本対土地所有の関係を介して形成されてくる局面で考えてみよう。資本制の生産関係のもとにあって、前述の採取林業 α で形成された『生産力』と、採取林業 ω で形成された生産力とは、資本にとっては同一のものと評価せざるをえない。採取林業 α の方が資本制の生産様式に馴み易いであろうが、土地所有（土地所有による地代収入の経営）が介在することによって、採取林業資本 ω も存在しうることになる。⁶⁴⁾

育成林業は、採取林業 ω の経営上に、または、採取林業 α の跡地の上に展開することになるが、前者の場合、造林・撫育なる育林は追加投資の形でなされ、育成林業 ω はスムーズに現出しようであろう。一方、裸地から出発する育成林業 α' は容易に資本につかまえられるものとしてあり、問題はここに集中的に現われる。この点をめぐって多くの林業経済研究者の精力的な論述が存するのである。

育林生産の特質は、よく生産期間の長期性に求められるが、より重要なことは生産期間と労働期間の乗離である。そして、労働が生産期間の前半部分に集中され、以後長期間「待つ」形で生産が続行されう点である。労働時間が生産時間と一致していく方向（集約化）を容易にとりえないのは、外部に採取林業 α が存在しているからであり、それを、育林業 α' の中に採取性が入り込んでいる、と表現することもできるであろう。そして、採取林業 α および林業 ω の存在は、育成林業 α' の全生産時間を通じての平均利潤の形成を許さないのである。採取林業 ω は、すぐれて採取林業 α から規定を受けた形でしか展開しないし、育成林業 α' は採取林業 α および林業 ω から二重に規定をうけつつしか、現実化しないのである。⁶⁵⁾

かくして、資源政策的には、採取林業段階では収獲規制に、育成林業段階では育成林業 α' の助成に重点が置かれることになる。しかし、育成林業が自律的に展開するためには、森林「蓄積」が前提にされなければならない、このことによって育林資本は擬似的にであれ生産時間＝労働時間（→「資本時間」）として、採取林業 α 資本に対して振舞うことができるのである。ところで、この「蓄積」は土地と合体したものとしてあり続けることに意味があり、一種の「土地合体資本」である。だからこそ、この森林の「蓄積」の維持ないし造成は、多分に土地所有の懷の中になされることになる。そして、これを前提として（この森林「蓄積」を「蓄積」として借地する形で）、育成林業（伐採＝育林）資本が形成されることになる。よって、育成林業はまずもって、採取林業 α 資本に対する土地所有の対立の中に醸成してくると見れるのである。ところで、採取林業 α は、単に生産圏の外縁部に追いやられたわけではなく、育成林業の森林「蓄積」をめがけて常に中央部にも生きており、その跡地に内発的駆動力のない育成林業 α' が現実態として

種々の形で常に形成されることになる。⁶⁶⁾

ところで、林業は育成林業段階に入ることによって、そこで展開される育成林業 ω はすべて前節で述べた労働過程 ω としてあるかと云えばそうではない。この段階で「地力」なる自然力の採取をめぐる、その採取 α と採取 ω がやはり現出してくる。恒続林思想は終始林業 ω およびここでの生産力形成 ω の立場に立って、法正林思想を批判していたと考えられるのではなかろうか。なお、地力をも人工的に育成する段階を迎えた農業は、化学肥料および農薬を通じて鉱工業と密接に結びついており、その対自然関係は、地球規模での「自然の再生産」（「人間⇔自然」）のくみ込み方の問題へと深化しているのである。

この段階に至って、土地所有の懷の中で残存しえていた「自然の再生産」は危機に瀕し、圧倒的な『生産力』追求の前に自然は分断され続けているのであり、否定的契機としての自然（「人間⇔自然」）の“主体化”は、土地所有の枠を突破し、主体的労働者＝人間との結合を待っているように予感されるのである。

V む す び

筆者はこの数年来、いわゆる「生産力神話」に対して如何に内在的批判をなすべきかと苦悩してきた。しかし、それはもともとあまり大きな問題であり、確信ある解答がすぐに見つかるはずもないものであった。そして筆者は、強く関心をひくあまりに大きなこの問題を前に、混沌の中に埋没してしまいそうであり、「次に」進めない状態に陥っていた。この際、得た考えの何らかの整序をしておくことが必要であると思い、発表させていただいた次第である。よってこの小論は、筆者自身のための覚え書き風のものになっており、この点お許しを願わねばならない。今後、ここで述べた問題視角の具体化をなしたく考えているが、その作業をくぐりつつ、再度理論的展開を試み直したく思っている。忌憚ない御批判および御教示を乞う次第である。

注釈および引用文献

- 1) 拙稿（『京大演習林報告』第47号1975）
- 2) 拙稿「琵琶湖を気づかう我々の運動」（『月刊地域闘争』1970, 10月号）、同「瀬戸内海汚染総合調査報告」（京大新聞1972年11月6日号）、同「地域開発論にむけて」（『林業経済』1974, 2月号）
- 3) 拙稿「住友化学アルミ製錬（新居浜）によるフッ素公害」（京大災害研究グループ刊『災害研雑誌』第1号1973）、同「本四架橋に関する補償問題」（瀬戸内海汚染総合調査団刊『本四架橋とその環境破壊』1973）、同「水需要問題」（『琵琶湖汚染総合調査報告書』同調査団刊, 1973）、および『瀬戸内海汚染総合調査報告』同調査団（団長星野芳郎）刊, 1972, 等々。
- 4) 石渡貞雄氏によれば、「林業地代の理論確立を要求する現代の課題」は、「一つは、林業行政上での木材不足を克服しようとする植林政策の合理的なかつ適確な施策の拠りどころを求めるためである。一つは、農地改革の不完全を打破し、農地改革より土地革命に進ませねばならぬ根拠を正しく把握するため」（『林業地代論』1952, 「はしがき」）のものとしてあった。そして、高騰する木材の価格を需要供給決定論的に解釈するのではなく、地代論を介して説明していこうとした所に林業経済研究の学としてのはじまりがあったのである。
- 5) 高井征毅「マルクス主義の生産力概念と『自然破壊・環境』問題（上）（下）」（『林業経済』1975, 6月および7月号）
- 6) 村尾行一『育林の生産構造』（1969）
- 7) 石井 寛「第二日目の討論のまとめと若干の総括」（『林業経済』1974, 6月号, p. 43）
- 8) 小関隆祺「環境問題と林業」（『林業経済』1974, 6月号）
- 9) 筆者はこのような生産力－生産関係の矛盾の場所と階層闘争展開の場所とを同一化することに疑問を感じる。氏の云われる生産力と生産関係との矛盾は、資本主義的生産様式それ自身を発展させるパネである。よって「生産力の発展は、発展すればするほど資本主義的生産様式とは敵対的とならざるをえ」ないとはすぐには云えないであろう。

- 10) 平田清明氏は最近の論文で、マルクゼ批判の形で次のようなことを述べておられる。「過剰労働時間。…それは、勤労諸個人にとって『少数者の非労働時間』と龐大な不生産労働時間を維持しつつ自己自身の強制的な過剰化を規定する時間である。それは『少数者』の生活時間から『彼らの必要労働』を免除させつつ、逆に、彼らに『奉仕する』警察、軍隊、スパイ、ルンペン、ゴロツキ、お抱えの文士・学者・弁護士その他無数の無用なサービス業者などのお雇い労働を維持し、この死重の増大のもとで自己の過剰化を強制する時間である。」「この過剰労働時間は、…自由処分可能時間すなわち『文明』を規定する時間規定の対立的実現形態である。／ここに階級闘争がこの『文明』の収奪者に対する、おのれを賭した闘争として進展する。それは対立的な時間規定を揚棄する人間的な事柄に他ならない。／一過剰労働時間を語るることなしに自由処分可能時間を語ることはできない。」(平田清明「個体的所有概念との出会い」、『思想』1975、11月号所収)
- この限り正しい。しかし、筆者には、「文明」の収奪者に対する収奪と同時に、対自然関係における「文明」そのものの変革が二重化されなければならないことが現代的課題であるように思われる。
- 11) 確かに具体的世界をさし示せない概念は概念たりえず単なる抽象になる。しかし、たとえば、具体的利潤ないしは利子の確定的な定量方法をものにしていけないからといって剰余価値概念が自殺しなければならぬとは云えないであろう。
- 12) エチエンヌ・バリバル「史的唯物論の基本概念について」(ルイ・アルチュセールとの共著『資本論を読む』所収) p. 335
- 13) 同上書 p. 350。なお彼は、労働手段が労働力と切り離され労働対象と統一されることをテクノロジーと規定している。
- 14) 同上書 p. 344
- 15) 同上書 p. 349～350。よって彼の生産力規定は「自然にたいする現実的領有関係」(p. 344)としてある。
- 16) この点、磯部博一、稲村 勲、金森昂作、梯 明秀、故細見 英等々の諸氏による「批判社ゼミ」に負うところが大きい。
- 17) アルフレート・シュミット『マルクスの自然概念』(元浜清海訳) p. 82
- 18) マルクス『経済学批判要綱』(以下『要綱』) 高木幸二郎監訳 p. 418
- 19) 同上書 p. 83
- 20) マルクス『ゴータ綱領批判』(西 雅雄訳、岩波文庫)
- 21) マルクス『経済学・哲学草稿』(城塚 登・田中吉六訳、岩波文庫) p. 130～131
- 22) マルクス『資本論』(長谷部文雄訳、青木書店、第一部上 p. 329)
- 23) 「人間は、その生産においては、自然そのものと同じように振舞いうのみ、すなわち諸質料の形態を変化させうのみである。」(同上書 p. 126)
- 24) 同上書 p. 126
- 25) 同上書 p. 339
- 26) 同上書 p. 125
- 27) 同上書 p. 330
- 28) 表 三郎「労働と所有の分離—マルクス階級論の核心は何か—」(『現代の理論』1974、4月号、p. 58)
- 29) 向井公敏「『経済学批判要綱』における人間と自然—労働過程論を中心として」(『現代の理論』1972、2月号、p. 13)
- なお、『経済学・哲学草稿』では、次のように記されている。「人間の肉体的、精神的な生活が自然と連関しているということの意味は、自然が自己自身と連関しているということ、なぜなら人間は自然の一部分なのであるから、というにほかならない。」(p. 94)
- 30) マルクス『経済学・哲学草稿』p. 94
- 31) アルフレート・シュミット前掲書、p. 172
- 32) マルクス『要綱』p. 83
- 33) 同上書 p. 654
- 34) 同上書 p. 338
- 35) マルクス『資本論』第一部下 p. 533
- 36) 同上書 第三部下 p. 1155～1156
- 37) マルクス『要綱』p. 661
- 38) 『資本論』第四篇「相対的剰余価値の生産」の結びの節は「機械と大工業」が当てられ、資本制的生産は「人間と土地との間の質料変換を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地諸成分の土地への復帰を、つまり持続的な土地豊饒度の永久的自然条件を、攪乱する」こと、「すべての富の源泉たる土地と労働者とを破壊することによって、社会的生産過程の技術および結合を発展させるにすぎない」ことが述べられている。(第一部下、p. 800 および p. 801)
- 39) 資本に固有な形態運動としての流通と、この固定資本との関係の考察については山田鋭夫「『経済学批

- 判要綱』における流動資本と固定資本（上）（下）」（名大経済学部『経済科学』XV-3, XVI-1, 1968）
- 40) ヘルベルト・マルクーゼ「自然と革命—新しい感性の創出へ」（生松敏三訳、『現代思想』1973, 2月号, p. 72）
 - 41) アルフレート・シュミット 前掲書 p. 150
 - 42) 同上書 p. 176
 - 43) エンゲルス『反デューリング論』（『マルクス＝エンゲルス全集20』, 大月書店, p. 292）
 - 44) ヘルベルト・マルクーゼ 前掲書 p. 71
 なお、ファシズムを近代合理主義と自然の叛乱（解放）との悪魔的結合として捉える捉え方はフランクフルト学派に共通している。しかし、だからといって「自然の解放」への追求を放棄しないこともまた共有されている。
 - 45) この点を芸術美と自然美の形で取扱った最近の論稿に中村一『自然美の理論』（1975）がある。
 - 46) 武谷三男「技術論—迫害と戦いし知識人にささぐ—」1946（『武谷三男著作集1』所収）
 - 47) 星野芳郎『技術論ノート』1948, p. 136～137
 - 48) 武谷氏は原爆問題について述べている。「原子力が思想的に何をもたらしたかという問題について考えてみると、それは、ザインとゾルレンの分離に対して決定的なピリオドを与えたということだ。今までは科学は科学、われわれの善悪は善悪で別の話である。大砲やいろいろなものを造るのは科学であり、これをいのように使うか、悪いように使うかは人間の道徳の問題で、科学・技術と道徳は全然無関係であるという考え方でザインとゾルレンは分離の立場であった。ところが、…原子爆弾は、ザインとゾルレンの分離に決定的な終止符を完全に打つことになる。」（『原子力とマルキシズム』1948, 『著作集4』p. 301～302）そして公害問題は、「生産」と「使用」の分離的發展に対して反省を迫っている。「造る」中に「使う」意味を込めていかねばならない。労働を労働たらしめよ、労働をわがものに！が今ほど重要なものとなった時代はないであろう。
 - 49) 内田義彦『資本論の世界』1966, p. 97
 - 50) 対象化された労働の蓄積形態を「手の延長」のみにでなく、「大地の延長」および「労働力能の延長」にも考えて歴史構成を行なおうとする論文に、玉城哲・旗手勲『風土—大地と人間の歴史』1974, 中村尚司『共同体の経済構造』1975
 - 51) マルクス『資本論』第一部上 p. 334
 - 52) アルフレート・シュミット 前掲書 p. 69
 - 53) 同上書 p. 91
 - 54) マルクス『経済学・哲学草稿』p. 96
 - 55) アルフレート・シュミット 前掲書 p. 94
 - 56) マルクス『要綱』p. 1019
 - 57) 半田良一『林業経営』1972, p. 20
 - 58) 鈴木尚夫『林業経済論序説』p. 67
 - 59) 石渡貞雄 前掲書 p. 30
 - 60) 鈴木尚夫 前掲書 p. 71～72
 - 61) 同上書 p. 85
 - 62) たとえば手束兼一氏はこれを、「場所を異にして同時に」の問題＝同時異地点の併存問題、として「解決」された。（「木材価格と林業地代の基本構造について」、『林業経済』1952, 11月号）
 - 63) 拙稿『京大演習林報告』前掲号
 - 64) 同上書
 - 65) 造林・撫育作業を終った段階（小生山、中生山）で山を手渡すことが多々見受けられるが、これはこの育林業 α' が地主＝利子生み資本経営の中で成立していることをよく示している。
 - 66) 農業での地力をめぐる作付様式の問題＝農法論が、林業にあってはこの森林「蓄積」をめぐる問題として現われることが把握されているものに、田中 茂「国有林造林技術の展開とその考察」（『北大演習林報告』1962）がある。

Résumé

As a matter of fact, nature is boundlessly going to ruin under the great strides of progress of producing capacity. How can we form the new relationship with nature?

In this thesis, I have considered the K. Marx's concept of nature and that of productiveness, and tried to grasp critically the meaning of the productiveness in the theory of

history.

The productivity of labour is ultimately indicated by the shortening of necessary labour-time, which is concerned with the reproduction of a human being as a nature force. Then it is necessary to relativize the appreciation of the productivity of labour in the labour-process ensuring the reproduction of "total nature" (between the human being and the outer nature).

The capital, in our time, is pursuing the enlarged reproduction of itself (the accumulation of capital) and consequently the increasing productivity of labour is achieved; on the other hand, the conflict of total nature is being carried forward with the exploitation of external nature. In conclusion, we have to study on the productiveness as a complex construction, composing the productivity of labour and the reproduction of total nature.

Next, from the above point of view, I have made some reference to the productiveness in forestry. There are two systems of production in forestry; one is the system of production of timber with maintaining the resources of forest in that management, and the other is the system which works upon the resources to achieve the productivity of labour at its maximum.

For days ahead, I wish to explain the mechanism concretely how two these systems of production in forestry correlatedly come into existence.